

10 成塚向山2号墳・横穴式石室の検討

山賀和也（長岡市教育委員会）

1 はじめに

東毛地域における横穴式石室は、その多くが煙滅しており、橋本博文氏⁽¹⁾によってその一部を復元する試みも見られるが、全体の様相を把握することが難しい状況である。しかし、このような状況の中でもある程度データがそろっている横穴式石室について検討し、東毛地域における様相を整理し、それらと比較検討する形で横穴式石室から見た成塚向山2号墳の年代等の位置づけを行うことにしたい。

2 東毛地域における横穴式石室の様相

(1) 成塚向山2号墳の横穴式石室

まず、今回成塚向山2号墳から検出された横穴式石室は、ほぼ矩形の平面形を呈する無袖型横穴式石室である(図1)。石室全長は約5.1m、玄室長約3.4m、玄室幅約1.7m、羨道長約1.7mで、羨道幅は梱石付近で1.4m、入り口で1.3mと石室入り口付近が若干狭くなる。奥壁は、横長の石材を2石積んで構成している。側壁の石材の積み方は、左側壁の

奥壁側の巨石を除いては、中型の石材を、横方向の通目積にしているようである。また、玄室部分と羨道部分で明確な積み方の違いは見られない。

(2) 東毛地域における横穴式石室の変遷

次に、東毛地域の横穴式石室について検討を行ってみたい。東毛地域における、最古の横穴式石室は6世紀中葉と考えられる円墳の亀山京塚古墳⁽²⁾である。亀山京塚古墳の横穴式石室は、玄室平面形が矩形の両袖型石室であり、全長が4.8mの比較的小型の石室である。羨道幅は、玄室幅の1/2であり、玄門部分には楣石が置かれており、玄室と羨道の区分が明確である。玄室側壁の石材は、横長に置き、横に目地が通るように積まれている。また、奥壁は大きめの石材を中心にその周りを小型の石材が埋めるように構成されている。

6世紀後半～末になると横穴式石室は、首長墓層にも採用される。石室平面形は、亀山京塚古墳の流れを受けた両袖型に加え無袖型石室が採用され、さらに首長墓層には複室が新たに登場してくる。まずは、円墳の両袖型についてみると、西長岡東山12号墳⁽³⁾、寺ヶ入馬塚古墳⁽⁴⁾、業平塚古墳⁽⁵⁾があげられる。これらは、亀山京塚古墳と同じく玄室は矩形を呈すが、玄室幅に対する羨道幅の比率(表1)が、亀山京塚古墳が0.5であるのに対し、当期の石室は0.7～0.8となり、玄室の幅に近づいている。また、これらの古墳の側壁の石材の積み方については状態が悪く詳細を知りえないが、奥壁についてみると、玄室幅とほぼ同じ大型の石材を基礎として配置するか、あるいはそれを何段かに積んで構成されている。一方、新たに登場してきた無袖型を見てみると、オクマン山古墳⁽⁶⁾、向山古墳⁽⁷⁾があげられる。両古墳とも石室の状態が悪く詳細を知ることはできないが、オクマン山古墳は奥壁から入り口に向かって狭くなる撥形の石室平面形であるが、向山古墳は

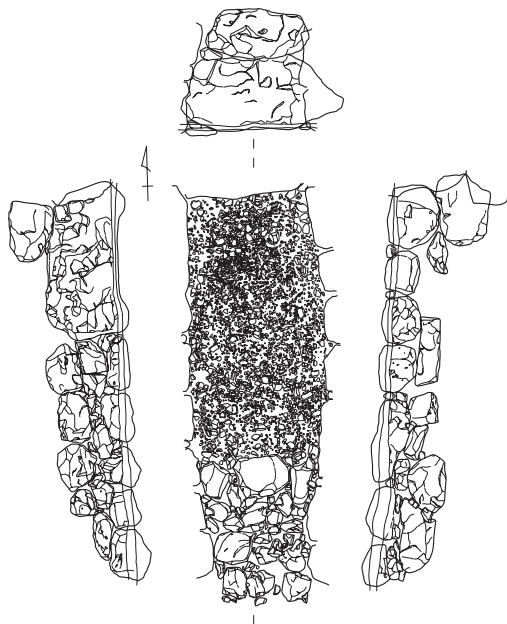


図1 成塚向山2号墳 横穴式石室 (1/100)

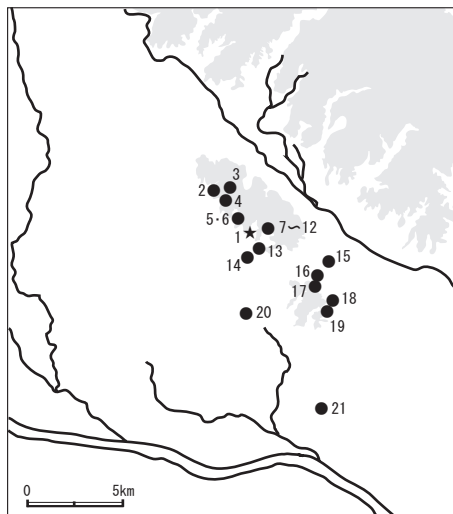
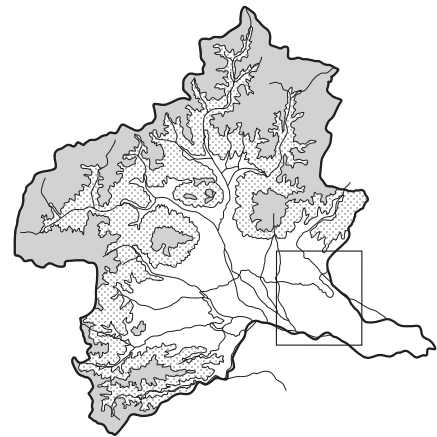


図2 分析対象の古墳分布図

矩形の石室平面形をしている。また、築造年代は、前者が墳丘に鷹匠埴輪に代表されるような充実した形象埴輪が配置されていたのに対し、後者は埴輪が確認されていないことから、向山古墳は7世紀代に下る可能性が考えられる。

前方後円墳についてみると、両袖型、無袖型、複室と3通りのプランが採用されている。両袖型石室については、今泉口八幡山古墳⁽⁸⁾があげられる。側壁の壁面構成は、ある程度整えられた大ぶりの石材を1段目に配置し、2段目以降は同じサイズの石材を積むかまたは少し小さめの石材を積んでいるようである。また、奥壁は大型の石材を1石置き、天井との隙間に小石をつめて構成されている。無袖型石室については、西長岡東山3号墳⁽⁹⁾、二ツ山1号墳⁽¹⁰⁾、西山古墳⁽¹¹⁾があげられる。これらの石室平面形は、奥壁に対して入り口がやや狭くなる撥形

表1 横穴式石室集成表

番号	古墳名	墳形(m)	墳丘規模	平面プラン	全長(m)	玄室長(m)	玄室幅(m)	羨道長(m)	羨道幅(m)	玄室長幅比
1	西長岡東山古墳群第12号墳	円墳	9	両袖型	6.3	2.8	1.5	2.5		1.9
2	御嶽山7号墳	円墳	10	両袖型	5.1	2.7	0.8	2.4	0.7	3.4
3	御嶽山29号墳	円墳	10	両袖型	4.8	2.3	1.0	2.4	0.9	2.3
4	御嶽山6号墳	円墳	12	両袖型	5.2	2.8	1.0	2.3	0.6	2.8
5	御嶽山15号墳	円墳	13	両袖型	6.3	3.1	1.1	3.2	0.7	2.8
6	御嶽山20号墳	円墳	13	両袖型	5.2	2.2	0.9	3.0	0.8	2.4
7	御嶽山8号墳	円墳	14	両袖型	6.0	3.2	1.2	2.8	0.7	2.7
8	寺ヶ入馬塚古墳	円墳	15	両袖型	6.2	2.8	1.7	3.4	1.0	1.6
9	菅ノ沢L-95号墳	円墳	20	両袖型	6.2	3.4	1.3	2.8	1.1	2.6
10	亀山京塚古墳	円墳	20	両袖型	4.8	2.6	1.4	2.2	0.7	1.9
11	成塚向山2号墳	円墳	20	無袖型	5.1	3.4	1.7	1.7	1.4	2.0
12	オクマン山古墳	円墳	22	無袖型	(8.1)	4.5	1.6	3.6		2.8
13	北山古墳	円墳	22	両袖型	6.2	3.0	1.8	3.0	0.9	1.7
14	向山古墳	円墳	23	無袖型	(7.9)	4.3	1.8	(3.6)		2.4
15	業平塚古墳	円墳	35	両袖型	6.4	4.2	1.8	2.2	1.3	2.3
16	西長岡東山古墳群第3号墳	前方後円	(30)	無袖型	(5.9)	4.2	1.7	(1.7)		2.5
17	今泉口八幡山古墳	前方後円	60	両袖型	10.5	5.7	2.2	4.8	1.3	2.6
18	二ツ山古墳1号墳	前方後円	74	無袖型	7.1	4.8	2.0	2.3	1.5	2.4
19	割地山古墳	前方後円	105	複室	(14.4)	5.3	2.5			2.1
20	巖穴山古墳	方墳	30	複室	11.5	5.2	2.0			2.6
21	西山古墳	前方後円	31	無袖型	5.8	4.6	2.1	1.2	2.0	2.2

に近い矩形を呈しており、玄室長に対して羨道長がかなり短い。側壁は、1段目にほぼ同じサイズの石材を並べているが、2段目以降は様々な大きさの石材を積んでいる。しかし、奥壁については前者が2段積み、後者が1枚岩を置いており違う点が見られる。西山古墳については、石室平面図しか公表されておらず詳細を知ることはできないが、実見した所によると西長岡東山3号墳と二ツ山1号墳と類似した形態である。複室については、割地山古墳⁽¹²⁾があげられる。割地山古墳は、部分的な調査のため石室の詳細は知りえないが、確認された石材の配列から複室構造であると推定されている。

7世紀になると、円墳は群集墳に採用される。代表例としては北山古墳⁽¹³⁾、御嶽山古墳群⁽¹⁴⁾、菅ノ沢古墳群⁽¹⁵⁾があげられる。石室形態は定型化されてきており、両袖型で玄室平面形が胴張りあるいは

奥壁よりも前壁のほうが広い形態である。また、玄門に門柱石を配置し、天井も玄室より羨道が1段下がる構造をとるようになる。それまでに採用されていた両袖型の石室形態とは大きな変化が現れる。一方、首長墓層を見てみると、当地域のこの時期には前方後円墳は確認されていないが、7世紀中葉に位置づけられる巖穴山古墳⁽¹⁶⁾がある。巖穴山古墳は、方墳で石室の形態は複室構造である。

(3) 階層性の抽出について

これまで、旧新田・山田郡地域の横穴式石室の変遷について概観してきたが、ここからは階層差について若干の検討を行ってみたい。まずは、首長墓層の中で考えてみたい。首長墓層においては、両袖型、無袖型、複室の平面プランが採用されているが、石室全長を比べてみると大きな差が看取できる。それは、両袖型、複室の石室が10 mを越えるのに対し、無袖型は10 mを越えないことである。両袖型石室の今泉口八幡山古墳には家形石棺が納められていることから、最上位であることは疑いない。一方、無袖型石室の西長岡東山3号墳と西山古墳は群集墳中の古墳であり、墳丘規模も他の前方後円墳に比べて極端に小さい。したがって、両袖型石室が無袖型石室に対して上位に位置していたことが考えられ、西長岡東山3号墳と西山古墳は群集墳中の盟主墳と考えられる。二ツ山1号墳は、無袖型石室を採用しているが、墳丘規模は今泉口八幡山古墳よりも大きく、矛盾するようにも考えられる。しかし、前述したように今泉八幡山古墳が最上位であることは間違いないことから、墳丘規模は階層差にあまり影響しなかったものと考えたい。

さて、複室の石室についてであるが、墳丘規模が100 mを超え、石室全長が10 mを超えることから、無袖型石室よりも上位の石室形態であったものと考えられる。次に円墳についてであるが、現段階では不明である。単独墳と群集墳で分けられる可能性があるが、明確な差を見出すことができなかった。したがって、円墳を採用する階層においては、石室形態の採用については規制がなかったものと考えてお

表2 階層性

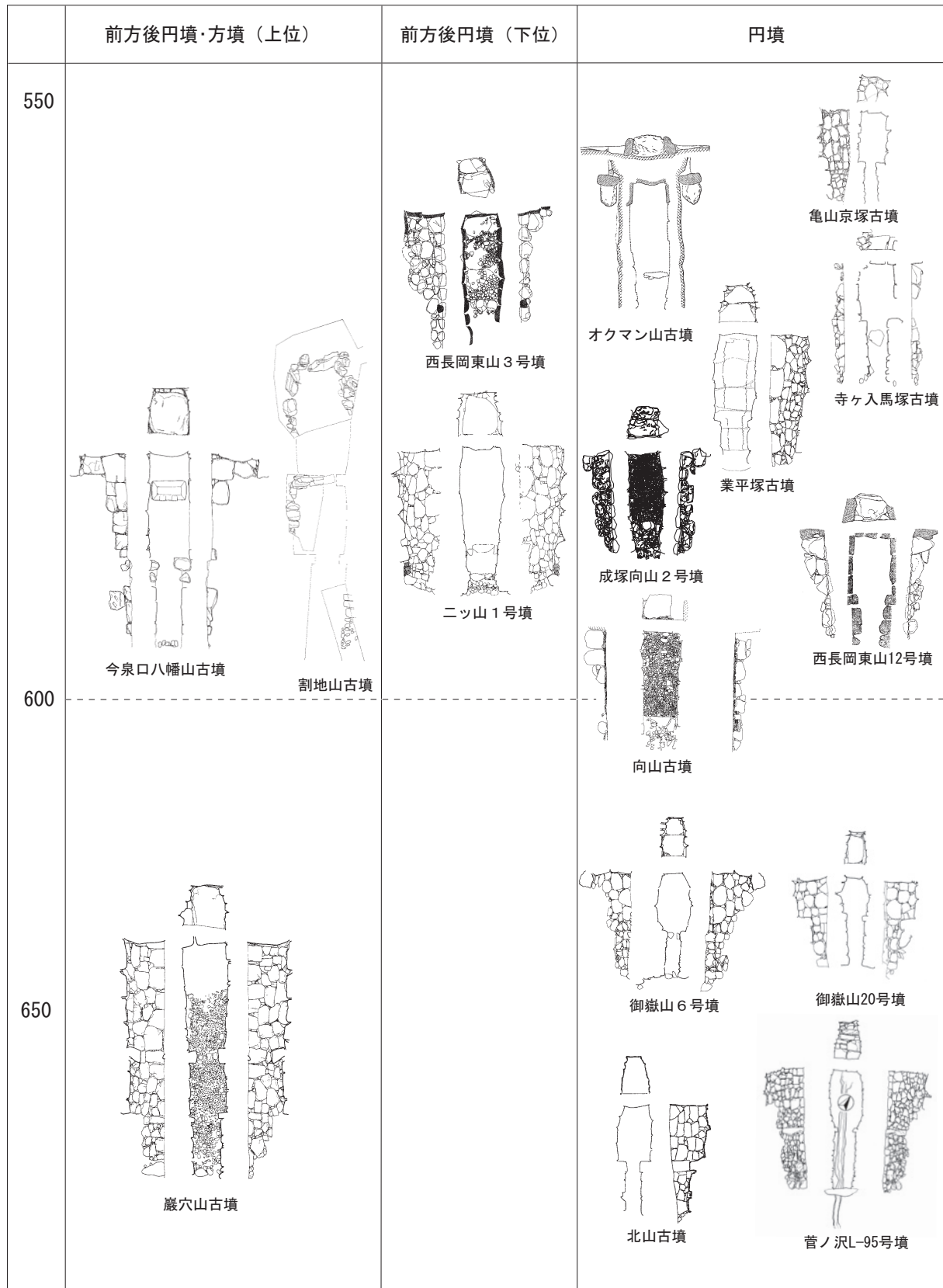
墳形	石室形態	石室規模	階層
前方後円墳・方墳	両袖型・複室	10 m以上	首長墓(上位)
	無袖型	10 m以下	首長墓(下位)
円墳	両袖型・無袖型		有力構成員

きたい。

ところで、すべての石室規模を比較してみると、前方後円墳で両袖型石室あるいは複室の石室を持つ古墳が、飛びぬけて大型であるだけでその他の古墳は、階層差を問わずほぼ同じ規模である。このことは、前方後円墳で両袖型石室を持つ古墳が、首長墓として絶対的な地位を持っていたことを表していると考えられる。したがって、階層差を整理してみると(表2)、まず墳形で首長層と有力構成員が分けられ、首長層の中でも石室形態と規模で上位と下位の二つに分かれることになる。中小古墳の中では、群集墳と単独墳の違いがある可能性がある。しかし、現段階ではその明確な違いが見当たらないため、可能性を指摘しておくだけにしたい。

3 横穴式石室からの年代的検討

以上、東毛地域の横穴式石室の変遷と階層差について検討してきた。ここでは、これらと比較する形で成塚向山2号墳の位置づけを行うことにしたい。成塚向山2号墳の石室の特徴は、平面形が撥型に近い矩形の無袖型石室で、梱石を置いて玄室と羨道を区分している。また、玄室に対し羨道が極端に短い。石の積み方は、側壁にはやや小型の割石を通目積みし、奥壁は大型の割石を2段に積んで構成している。これに類似した形態を持つ石室は、西長岡東山3号墳である。また、いくつかの石室規模の比率(表3)を見てみると、石材の積み方に若干違いを見せるが、もっとも近いのは二ツ山1号墳であり、西長岡東山3号墳も近い比率である。以上のことから、成塚向山2号墳を含めた3古墳の石室を築造した集団は同一集団である可能性が高い。したがって、成塚向山2号墳は、6世紀後半に築造されたものと考えられる。また、成塚向山2号墳の階層は、円墳であることから首長層より下位の有力構



0 1:300 10m

図3 東毛地域における横穴式石室編年

表3 無袖型石室比率表

古墳名	玄室長／羨道長	石室全長／玄室長	玄室長／羨道長	石室全長／羨道長
西長岡東山古墳群第3号墳	(2.5)	(1.4)	(2.5)	3.5
オクマン山古墳	1.3	(1.8)	1.3	(2.3)
成塚向山2号墳	2.0	1.5	2.0	3.0
二ツ山古墳1号墳	2.1	1.5	2.1	3.1
西山古墳	3.8	1.3	3.8	4.8
向山古墳		(1.0)		

成員であったと考えられる。

4 おわりに

最後に、東毛地域の様相と西・中毛地域の様相を簡単に比較することでまとめることにしたい。東毛地域の変遷をまとめてみると、まず6世紀中葉に、両袖型の横穴式石室が円墳に導入される。6世紀後半になると首長墓層にも横穴式石室が採用されるようになり、10mを越える両袖型の大型横穴式石室が採用されるが、複室や無袖型石室も採用されバラエティーがある。また、中小古墳にも両袖型石室と無袖型石室が混在している。7世紀代では、首長墓と考えられるものは7世紀中葉に位置づけられる巖穴山古墳しか確認されていないが、前方後円墳から方墳に転換し複室構造を持つ。また、中小古墳については、定型化した両袖型石室が採用される。そして、これまで採用されてきた無袖型石室は、見られなくなる。

さて、西・中毛地域の様相については右島和夫氏の研究⁽¹⁷⁾を参考にすることとし、東毛地域の様相と比較してみるといくつかの点で相違点が見られる。まず共通している点は、①6世紀後半以降の首長墓が大型横穴式石室を採用する点、②中小古墳において、6世紀代に両袖型石室と無袖型石室が採用されるが、7世紀代になるとほぼ両袖型石室が採用される点である。一方、違っている点は、①6世紀後半以降西・中毛地域の首長層には両袖型石室

しか採用されないのに対し、東毛の首長層に無袖型石室が採用されている点、②東毛地域には、截石積石室が存在しない点、③前庭を持った石室がほとんどない点である。これらを勘案すると、両地域は、6世紀代までは細かい部分で地域による差異が見られるものの、横穴式石室の変遷の方向性は同じである。しかし、7世紀に入り、前方後円墳が造営されなくなった以降、両地域の様相は大きな違いを見せる。このことは、東毛地域には西・中毛地域における総社古墳群を頂点とした勢力圏とは別の勢力が発展していたことを窺わせるものである。

註

- (1) 橋本博文 1978 「上野東部における首長墓の変遷」『考古学研究』第26巻第2号
- (2) 梅沢重昭 1981 「亀山京塚古墳」『群馬県史』資料編3 原始古代3
- (3) 金澤誠 1991 「西長岡東山古墳群(第Ⅱ次)」『埋蔵文化財発掘調査年報』1 太田市教育委員会
- (4) 梅沢重昭 1981 「寺ヶ入馬塚古墳」『群馬県史』資料編3 原始古代3
- (5) 細野雅男 1981 「業平塚古墳」『群馬県史』資料編3 原始古代3
- (6) 木暮仁一 1969 『オクマン山古墳報告書』太田市教育委員会 木暮仁一 1981 「オクマン山古墳」『群馬県史』資料編3 原始古代3
- (7) 半田勝巳 1983 『向山古墳』蕨塚本町教育委員会
- (8) 天笠洋一 1996 『今泉口八幡山古墳発掘調査報告書』太田市教育委員会
- (9) 天笠洋一 1991 「西長岡東山古墳群(第Ⅲ次)A区」『埋蔵文化財発掘調査年報』1 太田市教育委員会
- (10) 井上唯雄 1987 「第4章 古墳」『新田町誌』第2巻
- (11) 松島栄治ほか 1991 『蕨塚本町誌』上巻
- (12) 谷津浩司 2000 「Ⅱ東矢島古墳群(割地山古墳)」『市内遺跡XVI』太田市教育委員会
- (13) (11)に同じ。
- (14) 石塚久則 1981 「御嶽山古墳群」『群馬県史』資料編3 原始古代3
- (15) 渡辺博人ほか 1978 『群馬県太田市菅ノ沢遺跡11次・巖穴山古墳1次』駒澤大学考古学研究会
- (16) (15)に同じ
梅沢重昭ほか 1981 「巖穴山古墳」『群馬県史』資料編3 原始古代
- (17) 右島和夫 1994 『東国古墳時代の研究』学生社

参考文献

- ・甘粕健・小宮まゆみ 1976 「前方後円墳の消滅」『考古学研究』第23巻第1号
- ・島田孝雄 1999 「5. 旧新田・山田郡」『群馬県内の横穴式石室Ⅱ(東毛編)』群馬県古墳時代研究会
- ・島田孝雄 2001 「旧新田・山田郡(2)」『群馬県内の横穴式石室Ⅳ(補遺編)』群馬県古墳時代研究会
- ・右島和夫 2002 「古墳時代上野地域における東と西」『群馬県立歴史博物館紀要』第23号